

都道府県・ 指定都市番号	30	都道府県・ 指定都市名	和歌山県	研究課題番号・校種名	1 高等学校
				教科名	福祉
研究課題	学習指導要領の趣旨を実現するための学習・指導方法及び評価方法の工夫改善に関する実践研究 ○生徒の主体的な学習を通して思考力、判断力、表現力等を育成する指導方法及び評価方法の工夫改善についての研究				
学校名（生徒数）	わかやまけんりつありだちゅうおうこうとうがっこう 和歌山県立有田中央高等学校（322人）				
所在地（電話番号）	〒643-0021 和歌山県有田郡有田川町下津野 459 (電話 0737-52-4340 FAX 0737-52-6749)				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://www.aridachuo-h.wakayama-c.ed.jp				
研究のキーワード	学習ノート 主体的な学習態度 予習・復習 課題設定 観点別評価				
研究結果のポイント	○『社会福祉基礎』において、生徒が興味を持って授業に取り組める教材の作成 ○『こころとからだの理解』において、生徒の主体的な学習態度を育み、基礎・基本の知識の定着と思考力・判断力・表現力等の育成を図るための「学習ノート」の作成 ○『こころとからだの理解』において、主体的に学習に取り組む態度や思考力・判断力・表現力等を育成するための評価方法及び評価規準の作成				

1 研究主題等

(1) 研究主題

生徒の学習意欲を高め、言語活動の充実を図ることをねらいとした学習指導及び学習評価の在り方に関する研究

(2) 研究主題設定の理由

教育課程研究センター指定校事業において、平成 26・27 年度は『社会福祉基礎』の授業で指導と評価の一体化を目指した評価計画を作成し、課題解決型の授業及びそれを適切に把握するための観点別評価について研究した。平成 28・29 年度は『こころとからだの理解』及び『生活支援技術（医療的ケア）』の授業で、思考力・判断力・表現力等を育成する具体的な指導方法についてまとめた言語活動事例集を作成した。平成 30 年度からは、これまでの研究成果を踏まえ、『社会福祉基礎』及び『こころとからだの理解』の授業で、生徒の主体的な学習態度を育み、言語活動の充実を図るための学習指導や学力の 3 要素に基づいた学習評価の在り方について研究を深めていく。

(3) 研究体制

- ・校長、教頭、授業担当で教育課程研究指定校事業推進委員会を構成し、研究の方向性や効果を検証する。
- ・授業改善ワーキンググループ（WG）と連携を図る。
- ・和歌山県教育委員会県立学校教育課担当指導主事より指導・助言を受ける機会を設ける。

(4) 2年間の主な取組

平成30年度	<ul style="list-style-type: none">・『社会福祉基礎』及び『こころとからだの理解』の教材開発と授業での活用及び観点別評価の研究・千葉県立松戸向陽高等学校訪問（6月29日）・和歌山県立有田中央高等学校指定校訪問（研究授業・研究協議）（10月26日）・三重県立伊賀白鳳高等学校訪問（12月11日）・平成30年度国立教育政策研究所教育課程研究指定校事業研究協議会（2月5日）
令和元年度	<ul style="list-style-type: none">・『社会福祉基礎』及び『こころとからだの理解』の教材開発と授業での活用及び観点別評価の研究・群馬県立伊勢崎興陽高等学校訪問（10月25日）・三重県立伊賀白鳳高等学校訪問（10月29日）・和歌山県立有田中央高等学校指定校訪問（研究授業・研究協議）（12月12日）・令和元年度国立教育政策研究所教育課程研究指定校事業研究協議会（2月4日）

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

本校では、生徒が授業に興味を持ち、前向きに取り組むことが最も重要であると考え、特別支援教育の観点を取り入れ、生徒の実態に即した授業改善を行っている。授業時のけじめをしっかりと付け、分かりやすい説明や視覚的な教材掲示に留意し、多様な学習活動に取り組んできた。しかし、これだけでは生徒の主体性を育むまでには至っていないと感じていた。

評価の観点である「関心・意欲・態度」は、新学習指導要領では「主体的に学習に取り組む態度」となり、これまでより「目標を持ち、自ら判断し解決する姿」として捉えやすくなった。このことを踏まえ、今まで以上に生徒自身の主体的な取組を進めていく必要があると考え、授業改善に取り組むこととした。

1年生全員が履修する『社会福祉基礎』の授業では、生徒が興味や関心を持って学び、社会福祉の在り方について考察できることを目標とし、言語活動の充実に取り組んできた『こころとからだの理解』の授業では、生徒の主体的な学びを支援するための課題設定、授業展開の工夫及び評価規準の作成を目標として取り組んだ。また、新学習指導要領を見据え、主体的・対話的で深い学びに向けた授業改善についても検討を重ねた。

(2) 具体的な研究活動

① 『社会福祉基礎』の授業研究

『社会福祉基礎』は1年生全員が2単位を履修している。少子高齢化や地域の課題、社会福祉の歴史とそれを踏まえた理念、人間関係の基本について学ぶことで、基本的な社会福祉の知識を身に付け、自分の生き方や在り方を考えることを目指している。また、自分達の身近な課題として興味を持って取り組めるよう留意している。ここでは、教員主導ではなく、生徒が授業で学んだ専門的な知識を活用して、思考力・判断力・表現力等を身に付けることに粘り強く取り組めるような課題設定について考察した。

② 『こころとからだの理解』における主体的な学習態度の育成

『こころとからだの理解』は介護福祉士国家試験を受験する生徒が学び、医学だけでなく、法律、制度、倫理などの知識も含め、利用者理解や介護の根拠となる科目となっている。以前の授業ではワークシートを活用していたが、主体的に学ぶ態度の育成につながりにくく、十分な学習成果が得られない場合もあると感じていた。また、限られた授業時間で充実した

学習活動を行うためには事前・事後の自己学習の必要性があると考えた。そこで、昨年度から、単元のはじめに予習の部分を設け、授業で板書を行う内容、復習の問題といった構成の学習ノートを作成した。(図1)学習ノートを活用して自主的に予習を行うことで、基礎的な知識を学んだ上で関心を持って授業に取り組みめるよう予習の部分は教科書の穴埋め形式とした。授業で使用する部分は、ノートの形式で板書を行い、理解を深めた上で、課題に取り組みめるように作成している。

図1 「こころとからだの理解」学習ノート

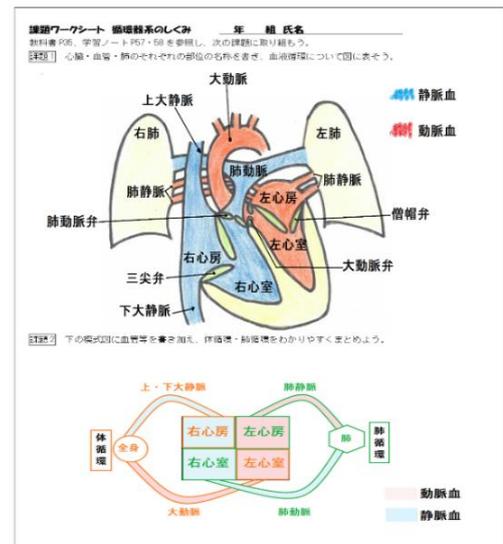
第2章 認知症の基礎的理解	
第3節 認知症の主な病気の特徴	5
予習	
<p>①-5 前頭側頭型認知症(ピック病)</p> <p>【病名】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(① 前頭葉)、(② 側頭葉)の神経細胞が壊れ、萎縮する。理性や行動を司る(① 前頭葉)の異常により、人格の変化、行動異常などを発症する。また、(② 側頭葉)に症状が強く出るときは、言語に異常がみられる。 <p>【発症リスク】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・40~50代と、若年での発症が多い。 ・前頭側頭型認知症は、(③ 青年性認知症)のひとつと考えられている。 <p>【症状】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(① 前頭葉)や(② 側頭葉)の萎縮があり、判断力低下、(④ 反社会的行動)が見られ、ワンパターンの行動(⑤ 常同行動)をとりやすい。 ・(⑥ 責業)の理解が難しくなることもある。 ・もの忘れよりも先に、(⑦ 人格)が変わり、言葉数が減る、うつになる、常軌的でない不自然な行動をとる、といった症状が出やすい。 ・いつも同じ道を歩いたり、同じ道に同じ行動をしたりするなど、(⑧ 行動パターン)の異常に気づくことが重要である。 ・もの忘れがそれほどひどくなくても、(⑨ 交通事故)にあって、(⑩ 車の運転)に支障が出たりすることがあるので、注意が必要である。 <p>【検査】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・脳CTやMRIにおいて、(① 前頭葉)や(② 側頭葉)の萎縮が見られる。 <p>【治療】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・介護において、どのような対応が有効であるか教科書で調べよう。 <p>常同行動を利用して、パターン化した対応をするのが有効な場合がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・病気の特徴を踏まえた介護従事者教育、行動療法などの(⑪ 非薬物療法)が推奨されている。 	<p>【経過】</p> <ul style="list-style-type: none"> 初期 人格変化 反社会的行動 中期 言語障害 後期 衰敗・運動機能低下 <p>【特徴】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・造脱(いついつ)行動が見られる 反社会的行動、性的及行動などを繰り返す ・わが道を行く行動が見られる ・常同行動が見られる ・責業行動が見られる ・知っているはずの言葉を聞いても意味がわからなくなる ・会話の喪失とは無関係に、同じ内容の言葉が繰り返る連続言語が見られる <p>問題1 次の①~④の問いに対し、()に適切な語句を挙げ。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① レビー小体型認知症の好発年齢は何歳ぐらいか。(70~80歳) ② レビー小体型認知症では大脳のどの部分の血流低下が著しいか。(後頭葉) ③ 前頭側頭型認知症の好発年齢は何歳ぐらいか。(40~50歳) ④ 常同行動が特徴なのはどのタイプの認知症か。(前頭側頭型認知症) ⑤ 人格の変化が目立つのはどのタイプの認知症か。(前頭側頭型認知症) ⑥ 具体的な幻視が特徴なのはどのタイプの認知症か。(レビー小体型認知症) ⑦ 反社会的行動が特徴なのはどのタイプの認知症か。(前頭側頭型認知症) ⑧ パーキンソン症状を伴うことがあるのはどのタイプの認知症か。(レビー小体型認知症)

学習ノートに板書を組み入れることで、全ての生徒にとって記述しやすくした。また、演習問題や学習のまとめを作成し、復習や介護福祉士国家試験の受験対策として活用できるように考えた。学習ノートはほとんどの生徒が予習や定期考査の学習等に活用できていた。今後は、学習に見通しを持って取り組めるよう冊子

での配布を検討している。

また、思考力・判断力・表現力等を身に付けることに粘り強く取り組めるような課題設定と、ホワイトボードや付箋紙などの活用により、話し合い活動が活性化するよう工夫を行っている。課題の評価については、評価規準を作成して活用した。評価規準を作成することで、生徒の記述について客観性や公平性のある評価につながった。また、評価規準を明確にすることで、指導のポイントを絞ることもできた。「主体的に学習に取り組む態度」の評価についても、本校の生徒には基礎となる知識の取得に課題が見られるため、それを身に付けられるよう生徒の主体性を引き出す工夫を行っている。(図2)

図2 知識の習得に関する課題



新学習指導要領で述べられている「深い学び」とは、授業の課題設定において学ぶ内容についての見方・考え方が意識されているかによると考える。授業の構成の中で課題設定を考えると、人間としての尊厳の保持と自立を目指すことなどの福祉の見方・考え方を踏まえているかの検証が必要になる。例えば、『こころとからだの理解』の単元である「認知症の理解」の「認知症の主な病気の特徴」の学習において、単元の評価規準を設定した。(図3)

次に、学習課題として「前頭側頭型認知症の疾患の特性を踏まえて、行動のコントロールの具体例を考え、適切な介護について考えよう。」という課題を設定した。思考が深められ、適切な評価につながる課題となるよう留意した。評価の観点としては具体的に「何ができていますか。」を示した。(図4)「利用者の生活の質に配慮した適切な介護」という一文を入れることで「福祉の見方・考え方」を示している。中間の規準であるA(3点)が「おおむね

満足」できるものであり、本時の目標にあたる。そして、「十分満足」がS（4点）、「努力を要する」がB（2点）、「かなり改善が必要」がC（1点）としている。評価は、形容詞や副詞で差異化し、到達度を測ることができたと考える。

図3 「認知症の主な病気の特徴」の単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
認知症の原因となる疾患の概要及び認知症ケアについて、基礎的な知識を身に付けて適切に活用している。	認知症に伴う心理的影響や日常生活に及ぼす影響と認知症ケアの在り方について考察を深め、その内容を適切にまとめた上で表現する力を身に付けている。	認知症の原因となる疾患の概要及び認知症ケアについて自ら学ぼうとし、認知症に伴う心理的影響や日常生活に及ぼす影響と認知症ケアの在り方について積極的に考察し、気づいたことを適切にまとめようとしている。

図4 前頭側頭型認知症に関する課題の評価規準

評価の観点	S（4点）	A（3点）	B（2点）	C（1点）
【主体的に学習に取り組む態度】 自らの考えをまとめて分かりやすく伝え、相手の説明を傾聴し、気づきや疑問を見付け、自らの意見を発展させることができる。	自らの考えをまとめて分かりやすく伝え、相手の説明を傾聴し、気づきや疑問を見付け、自らの意見を発展させることができる。	自らの考えを分かりやすく伝え、相手の説明を傾聴し、気づきや疑問を見つけることができる。	相手の説明を自らの活動を止めて傾聴することができ、自分の考えを分かりやすく説明できている。	活動に参加しているが、自らの考えを分かりやすく伝えることも、相手の話をしっかりと聴いて理解することもできていない。
【思考・判断・表現】 前頭側頭型認知症の特性及び、行動のコントロールの在り方を踏まえ、利用者の生活の質に配慮した適切な介護について考察できている。	前頭側頭型認知症の特性である常同行動に関連する適切な意見が複数の視点で書けている。	前頭側頭型認知症の特性である常同行動に関連する適切な意見が1つであるが書けている。	前頭側頭型認知症の特性である常同行動に関連するおおむね適切な意見が書けている。	前頭側頭型認知症の症状に対して物の管理などの対応のみであるが、自分なりの意見が書けている。

3 研究の成果と課題（○成果●課題）

- 『社会福祉基礎』の授業において、生徒が興味を持って授業に取り組める教材の作成を行うことができた。
- 『こころとからだの理解』の授業において、生徒の主体的な学習態度を育み、基礎・基本の知識の定着と思考力・判断力・表現力等の育成を図るための「学習ノート」を作成した。また、主体的に学習に取り組む態度や思考力・判断力・表現力等を育成するための評価規準の作成により課題解決型学習の質的な向上ができた。
- 『社会福祉基礎』では、教員主導ではなく、生徒が主体的に学習に取り組めるような課題になるよう改善を行う必要がある。
- 『こころとからだの理解』では、課題の充実と評価規準の明確化によって、より一層生徒の主体的な学習態度を育む必要がある。

4 今後の取組

『社会福祉基礎』については、興味・関心を持って取り組む中で専門的な知識の理解や課題解決に主体的に取り組めるよう、学習内容の検討や教材の開発を行っていく。『こころとからだの理解』については、主体的に学習に取り組めるような授業展開の工夫と、評価結果を基に学習が深められる課題かどうかの検討を行う。課題は、学習の主題に沿ったものであり、生徒が意見を収束や発散させながら課題解決できるものとなるよう留意する必要がある。